



研究を続けていくために

節電でクーラーの利かない週末の研究室。ひと気も少なく、しばしば一っと考える。格好よく、“iPS細胞やゲノム編集技術が急速に普及する中での研究の近未来”についてでも書いてみようと思ったのだが、暑さで頭が回らないので、またの機会に。

まずはやさしい問いから。我々はなぜ、科学研究をするのか。

単純にそれがワクワクするものだからではないか。日々の実験はとても地味なものだが、少しの進展・失敗にも一喜一憂するものだ（遺伝子クローニングの際、大腸菌コロニーの見た目から、当たりが予想通りだったというだけでうれしいものである）。毎回、予想外のことが起こらないかとほんのわずかの期待をし、再現なしの“幻の大発見”もしばしば、行けた！と思っても実は既知のことだった、論文で先を越された、ということも多い（私だけかもしれないが）。それにもめげずに続けられるのは、研究に代えがたい面白さがあるからだろう。最近自ら実験を行う時間もだいぶ減ったが、できうる限り続けたいと思う。実験をやっているからこそその“勘”というのが絶対にあるはずだから。

さて、徒然の独り言もここら辺にして、フォーラムらしい話題に転換しなければ。

最近ひしひしと感じるのは、研究環境を取り巻く現実の厳しさである。個々を挙げればきりが無いが、大きく、「研究費」と「人材」の問題に集約できるだろう。そもそも研究にもものすごくお金がかかるようになり（お金をかければかけるだけ早く進められるようになったとも言えるかもしれない）、競争的資金の獲得も厳しさを増すばかり。

り。一度でも研究費獲得戦線から離脱すると、再び這い上がるのは厳しいので、必死のサイクルを止めることができない。組換えDNA実験などの手続きや各種ガイドライン、倫理の問題など、様々な研究ルールへの対応も必須であり、研究を始めるまでのハードルは高くなる一方だ。明確な出口戦略を要求される研究費も多くなり、役立つ成果を出さねばと胃が痛くなる。人材の問題も私の周りでは深刻だ。人員削減の嵐はやむ気配がなく、学生の博士課程進学も明らかに減っているように思う。就職活動で研究期間が圧倒的に減っている修士課程の学生は本当にかわいそうだ（最初は目を輝かせて研究に取り組んでいたのに！）。

マクロな視点で考えればこの状況もやむを得ないのかもしれないが、何か対応できることがないか研究者皆で考えることは大切だと思う。学会という集団の力をもってすれば、少しでも良い方向に変えられる可能性はあるはずだ。例えば、研究費の増額が難しいならば、出費を減らす方法を考えればよく、それには試薬・機器を安くする仕組みに研究者がもっとコミットしたり、身近な節約法を共有するために交流サイトを学会ホームページに作ったりできるだろう。研究ルールの様々な手続き・審査に時間が取られるのであれば、手続きを研究機関ごとでなく全国で統一した様式にして他の研究者の記載例を参照できるようにしたり、審査を退職された元気な研究者に（インターネット経由で）担っていただいたりすることもできる。さらに言えば、研究者の養成において、少なくとも大学院博士課程を無料にすることはとても大事なので、これは学会を挙げて国に主張していくべきだろう。ふるさと納税よろしく、“まなびと（学人）納税”を創設していただくのではないかな。暴走しはじめたので、今回はこれくらいにしておこう。

今日のささやかな研究成果は、クローニングした遺伝子の解析結果からデータベース（NCBI）の1塩基の間違いを発見したこと（のはず!?!）。ちょっとうれしい。いろいろな困難・悩みはあるものの、そんな小さなワクワクを忘れずに、大きな目標に向かって日々歩んでいきたい。

（ダック）